

# 名もなき男の プロレス一徹人生

陽の当たらない裏街道で闘い続ける一人の漢の生き様

金も名誉もいら  
なされど我がプロレスラー人生に悔いは無し

# 渡辺宏志

プロレスの凋落が叫ばれて久しい。しかし、そんな「プロレス冬の時代」の中にあっても、陽の当たらない裏街道で自らのスタイルを貫きながら、プロレスの原風景を体現する一人の男がいる。そこには、名誉も、栄光も、金も存在しない。

取材・文・片岡亮  
撮影・堀田春樹

02年夏、一つの騒動が起った。一人の若い空手家がネットの掲示板にこう書き込んだ。

「この間、見た弱小プロレス団体の試合、弱そうな奴ばっかで俺なら片手で勝てる」

大半の団体なら相手にもしない。だが、名指された団体は違った。正式にその空手家に対戦のオファーを出した。ストーリー無しの本物の決闘を申し込んだのだ。しかし、空手家の発言に憤ってはいても、団体内に実際にその喧嘩を買う度胸のあるレスラーはなかなかいなかった。理由は簡単だ。少ない客の前で勝つたところで金にも名誉にもならず、余計なリスクを背負いたくない。しかし、「自分がやりましょうか」と丁寧な口調で名乗りを上げた男がいた。渡辺宏志。世間的には全く無名の身長170センチにも満たない小柄なプロレスラーだった。

そして試合当日。渡辺はサッと組み付いては投げ飛ばしアームロック。渡辺が手を離しても空手家

の腕は妙な方向に曲がっていた。折れたのだ。

試合は一瞬で終わった。空手家の手はゴング前に持っていたタオルがそのまま握られていたのだから、いかに早い時間で決着が付いたかが分かるだろう。

「正直、折るのは気分がいいものではなかったですが、この時はやはり相手の言い訳のきかない形で終わらせなければならなかった」

怖ろしい男に思えるかもしれない。だが、渡辺は極めて低姿勢で温厚な性格の男だ。試合後、空手家の腕に包帯を巻いてケアしていたのも渡辺だった。

### 黒タイツに黒シューズ 小さな男が見つけた 「生きる道」

本来の渡辺の試合スタイルは地味の一語。黒タイツに黒リザンジューズというシンプルなおコスチューム、攻撃は男の息使いだけが聞こえるような関節技の攻めが大半を占める。大技も出るの

は試合の終盤に数えるほど。一見、無個性に見えるが、自己主張の激しいプロレス界において、このクラシカルなスタイルは今どき珍しい。

「最近のプロレスは面白さが履き違

えられていると思うんです。見て楽しむベクタクルスポーツが、安っぽい三流バラエティになっている」

実は筆者はキックボクサーとしてリングに上がり、渡辺と対戦した経験がある。身長で約30センチも上回る筆者のパンチを鼻が折れながらも、血だらけになりながらも顔面を受けた渡辺は、試合後笑顔でこう挨拶してきた。

「いやあ気持ちいい試合ができましたねえ」

一般的な評価は前座の地味な無名選手だったかもしれない。だが、この男は本当に強かった。

客に媚びないから業界でも脚光を浴びたことはほとんどない。10周年記念試合が諸事情で延期され、先日「12周年」という不恰好な形で行われた。渡辺にとっては滅多にないメインイベントだったが、ここでも彼はいつものスタイルを貫いた。リミットの30分近く経ってやっと大技がバツドドロップ一つ。あとはひたすら体を密着させた関節技の攻防でタイムアップ。少ない技だけで魅せられる職人芸だが、仲間内でも渡辺の真価を知らない者は多い。

昨年まで所属していた団体では漫画「ちびまる子ちゃん」に出てくる「ともぞうじいさん」を真似たキャラクター「友蔵G」に扮装させられた。ともぞうTシャツに、腹巻と作業ズボンのお笑い・エンタメ路線。

「確かにその場で客は面白がるかもしれない。でも、友蔵見たさに再

びチケット買う人なんかいるわけがない」

渡辺は「前座第1試合でいいから自分のままでやらせてくれ」と訴えたが、団体からの返答は「ノー」。

「頭にきたんで、ある日、勝手に黒タイツに黒シューズで試合に出て、本来の試合スタイルでやっちゃったんです」

最初はお笑いプロレスを期待していた客からの不満の声は、試合が進むうちにだんだん拍手と歓声へと変わっていった。終わってみれば、客の反応はその日のベストバウトとの感想が大半を占めた。そして、渡辺はこの団体を退団した。

### タイガーマスクと 山本小鉄に憧れ 小学生でプロレスラーに なることを決意

頑固な男が小学生のときに憧れたのは漫画の「タイガーマスク」と新日本プロレスの前座選手・山本小鉄だった。

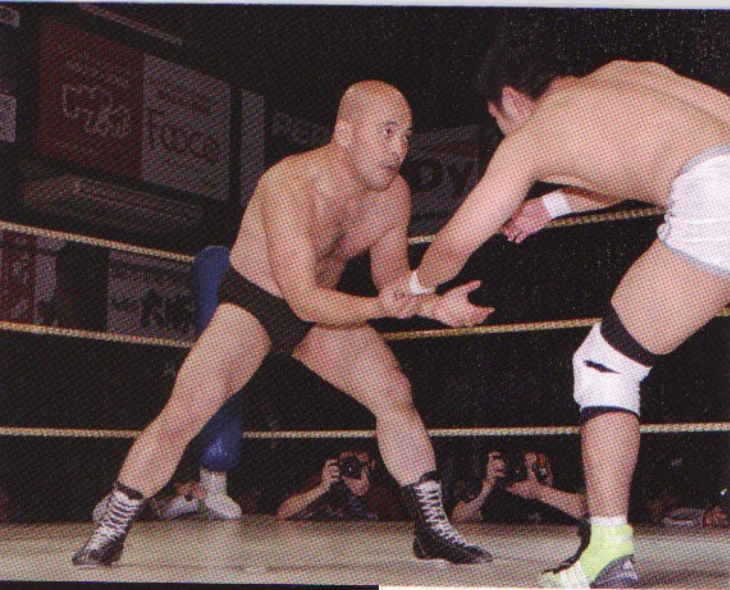
「ウルトラマンのような宇宙人や、仮面ライダーのような改造人間にはなれないけど、スポーツを題材にした主人公には努力次第で近づける。孤児院を助けながら戦う主人公の伊達直人を見て、これこそ本物の男だと思っただけです。漫画でも猪木さんや馬場さん、実在の選手が登場したのでプロレスを見るようになって、漫画ほどではないにしても、生身の人間がこんな凄いことやって

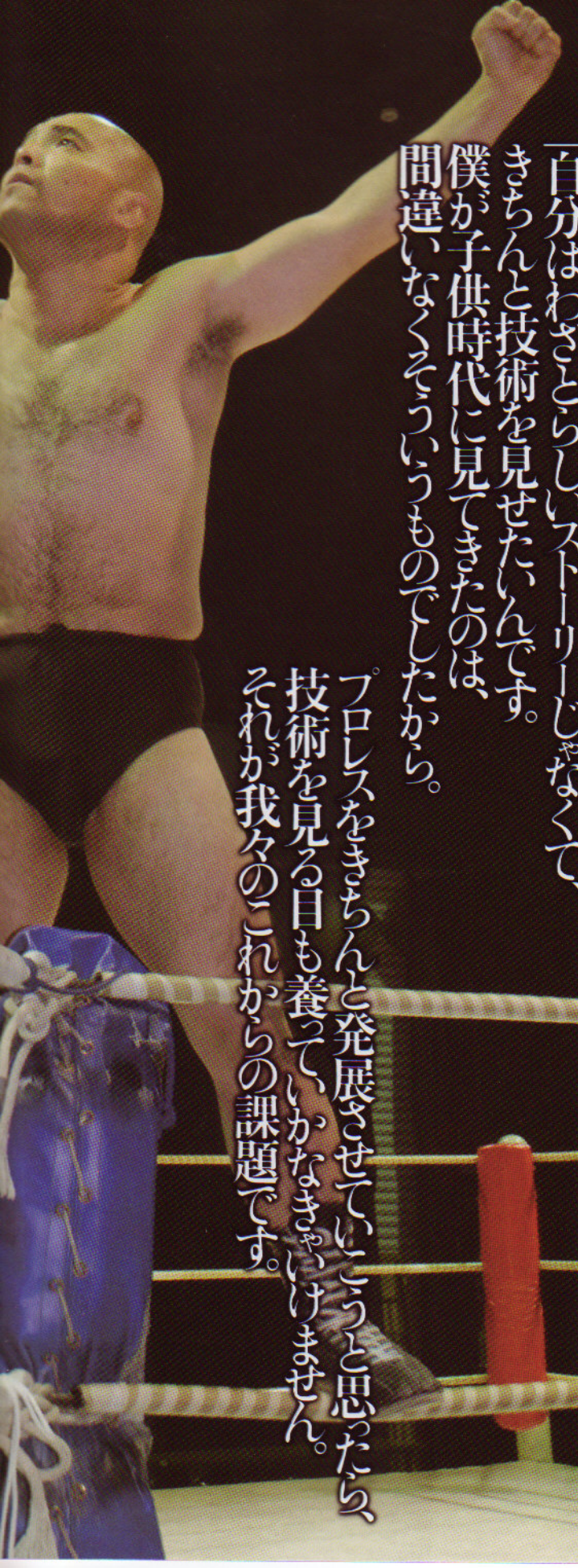


るのだった。そんな中、惹かれたのが山本小鉄さんでした。体が小さくてもスーパーヘビー級の外国人選手に一歩も引かないファイトをしていったんです」

小学生で既に渡辺はプロレスラーになることを決意。ひたすらトレーニングに明け暮れ、高校卒業後は進学も蹴って新日本プロレスが開校した「プロレス学校」に通った。なんとコーチは憧れの山本小鉄だった。「山本さんはイメージどおりの方でした。技術だけじゃなく、プロレスラーの心得も教えて頂きました。ある日、山本さんに「そんなにプロレスが好きならテストを受けてみるか」といわれたんです。最初は「僕みたい

## 「プロレスを見るようになって、漫画ほどではないにしても、生身の人間がこんな凄いことやってるのだから、そんな中、惹かれたのが山本小鉄さんでした。体が小さくてもスーパーヘビー級の外国人選手に一歩も引かないファイトをしていったんです」





**「自分はわざとらしいストーリーじゃなくて、きちんと技術を見せたいんです。僕が子供時代に見てきたのは、間違いなくそういふものでしたから。」**

**「プロレスをきちんと発展させていこうと思ったら、技術を見る目も養っていかないとダメです。それが我々のこれからの課題です。」**



となったが、渡辺は93年6月に「WING」というインディー団体に合格。しかし、わずか半年で団体の経営状態が悪化、退団を余儀なくされた。

「業界の悪い部分を見て、かなり冷めてしまっていました」

プロレスの道は諦めかけた。そんな折、練習仲間だった峰野という男に励まされた。

「可能性があるならプロの世界を諦めないでくれ。俺自身が団体を辞めてしまっただけ悔しいから」

な小さい選手が……と遠慮したんですが、山本さんにうちのライガー

の団体「WAR」に在籍していたことがある。ひとりの挫折者が、影

では別の挫折者を励ましていたとは意外だった。渡辺はこの峰野を紹介して、元新日本の選手・ムサシ大山を紹介され、試合直前の大山の控え室へ行った。

91年秋、プロレス学校自体が閉校

「俺のところに試合オフアアが来ているんだけど、どう？」

大山はそう渡辺に声をかけてリングに向かった。ただ、将来への不安から即答できない自分がいた。大山の試合中、深く悩んだ。でも、大山が試合を終えて控え室に戻ってくるなり口を出したのは「さっきの話、お願いします」という言葉だった。

大山は笑顔で答えた。

「ナベちゃん、その言葉を待ってたよ」

**「憧れの初代タイガーマスクとの対戦明日のお天道様は拝めなにかもって思いました」**

こうして決まったデビュー戦の相手は宮本猛という重量級の空手家だった。宮本と対戦した若い選手が一樣に再戦を嫌がるほどの強豪

だったが、「正直怖かったけど、やらなきゃ男じゃねえ」と生まれて初めてのリングに向かった。

「人間サンドバッグのように蹴られまくって、最後はハイキックを顔面に受けて意識が飛んでKO負け。でも、終わったときは感無量でした」

その後、いきなりのメキシコ遠征が決まり、現地で試合。帰国後は週末、酒場の客を前に試合を行う屋台村プロレスで経験を積んだ。気がつけば、数々の弱小団体から声がかかる存在となっていた。あるとき、大先輩の選手・鶴見五郎からアドバイスを受けた。

「おまえが基礎ができるのは良かった。今度はそこにプラスアルファしないとプロとして流通しない。これからはプロフエッショナルのレスリングをやってみろ」

自分の試合スタイルに開眼した



のはこのときだった。

「目の前がパッと明るくなった気がしたんですよ。よし俺はこれだ」と同時に鶴見からは試合オフアアを

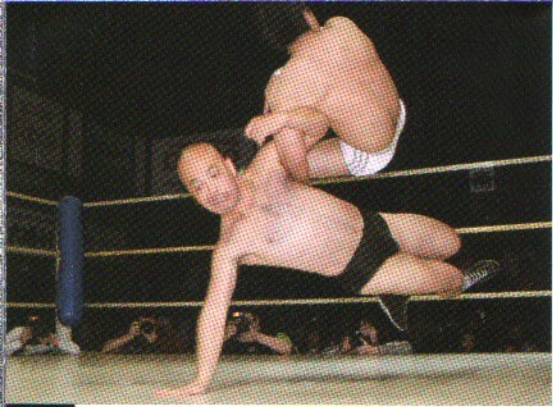
# もし1万人が『ハッスル』を支持しても、 1人が渡辺宏志がいいと言えれば、 その人のために自分は戦います」

つたが、渡辺のレスリング技術が評価されている起用だったのだ。

「グラウンドでリストロックにいいだけで、あとは一方的にやられただけ。やってくる本人からすれば長く感じましたが、いつか、もつとまともな形でもう一度やりたい……」

渡辺は今年5月に旗揚げする新団体「夢名塾プロレス」に所属する予定だ。

96年8月4日、タイガーマスクとの試合は4分足らずでマットに沈められた。タイガーの試合としては最短の部類だったが、これは2週間後にビッグマッチを控えたタイガーが、あまり無理はできないという事情があり、「タイガーの技を受けられる者」ということで渡辺に白羽の矢が立ったのだ。結果は秒殺負けだ



## プロレスを心から愛する男のもう一つの顔

熱く語る一方で、「13年やってもプロレスじゃ飯が食えていない」と苦笑する渡辺だが、本業は障害者施設の介助だ。最初はボランティアでやっていたが、現在は本職となった。

「筋ジストロフィーとか不治の病の人でも、決して悲観してないんです。治る見込みが全くなくて死の不安があるのに前向き。これは一体何だろうと患者さん本人に聞いたことがありました。返ってきたのはどうせまたお腹が減るからといって、物を食べないわけにはいかないだろうというものでした。僕もプロレスという特殊な社会で何度も絶望感を味わいましたし、2年前には糖尿病にもなったんですが、そこで腐っていたら何も改善しない。幸い僕は物を持つことも自由に歩くことも介助なしに食事をすることもできる。ちよつとしたことで落ち込むのはやめました」

この前向きな思考で糖尿病も独学の食事療法によりわずか1年で脅威の回復。渡辺は現在「プロレスで培ったものを社会に還元したい」と、横浜市立大学でプロレスを目指す若者のコーチもやっている。

「学生プロレスは表面的な物マネ

だけで、技術が正しく伝承されていない。きちんと教えればプロのレベルをアマチュアでもできるんです。最初はスクワット200回でも死にそうなる顔をしていた連中が、今じゃメジャー団体の合同練習ぐらいなら付いてくれるようになってますよ」

「どうだろう、気がつけば渡辺自身もまるで山本小鉄だ。近年、髪の毛も剃って風貌まで似てきた。先日、その師・山本とはブロードバンド番組の企画で16年ぶりの対面を果たした。

「当然、僕なんか忘れてるだろうと思ってましたけど、覚えていてくれたんです。相変わらずレスラーの心得を話してくれました。〃体を鍛えた者は世間様の前では腰を低くしてはいけない」と。常識から逸脱したことがヒロイックに扱

われる世の中ですが、レスラーは常識にとらわれるなという見方を曲解してはいけないと思います」

「陽の目を見る見ないは結果論、やりたいことをいかに納得する形でやるか。それができれば自分としては幸せです。体が続く限りリングに上がり続けますよ。60歳になってもプロレスをやっている自分を想像するのが楽しいですね。年食ってこんなジジイでも元気にやっていると云えたら素敵ですから」

ひたすら我が道を行く——サクセスストーリーとは程遠いかも知れないが、名譽なき男の生き様は常にロマンに溢れている。(文中敬称略)



## PROFILE 渡辺宏志

……わたなべひろし  
1970年11月19日、神奈川県出身。身長165センチ・体重90キロ。元WMW世界5ミドル級王者。今年春、新団体を旗揚げ予定。「漢」渡辺宏志のプロレス人生の新たな幕明けに乞うご期待!